

バックパッカーの「沈没」と日本社会からの「逃避」  
藤田 智博（人間科学研究科 コミュニケーション社会学）

1. 本報告の目的

インドのヴァラナシとカルカッタにおいて行った日本人バックパッカーの調査について、その成果を述べる。

2. なぜ日本人バックパッカーか？（実践・理論）

まず、実践的側面として、日本人バックパッカーの海外での暮らしが社会問題化しつつある現状がある。昨年12月、フリーライターの下川裕次によって『日本を降りる若者たち』（講談社現代新書）が出版された。そこでは、バックパッキング旅行、ワーキング・ホリデー、留学などを終えた後、日本社会へと完全には復帰せず、タイで暮らす若者たちの日常生活が報告されている。彼ら／彼女らの海外での生活は、日本国内における「ひきこもり」との関連から、「外こもり」とも呼ばれている。「日本を降りる」、「外こもり」といった表現からも明らかなように、そこには、海外で暮らす若者たちを逸脱として取り上げるまなざしが介在している。ゆえに、彼ら／彼女らの海外滞在が、ほんとうに問題であるとするならば、彼ら／彼女らがいかにしてそのような状態に至ったのかを解明することによって、その問題の「解決」に貢献できると思われる。

他方、彼ら・彼女らの海外での生活が、彼ら／彼女らの問題であるのかについては検討の余地がある。というのも、問題であるのは、彼ら・彼女らを逸脱視する際に暗黙のうちに参照されている規範や理念の方かもしれないからである。

90年代以降、文化を語る研究領域においては、ヒト、モノ、カネ、情報、イメージの国境を越える移動への関心が高まっている。というのも、文化という概念とナショナリズムとの結びつきが問題視され、ナショナリズムに還元されないような文化概念を構想する必要性が認識される中、移動という論点が浮上してきたからである。ここで移動は、「ナショナルなもの」を問い直す契機として浮上してくる。これによって、これまでの研究において無視されてきた移動を考察の対象とするとともに、現に生じている移動が有するポテンシャルを引き出すことが、新たな研究課題として重要性を帯びることとなってきた。

本研究は、そのような課題を引き受け、日本人バックパッカーを事例として、それが、いかなる意味で「ナショナルなもの」の問い直しとなっているのかを考察しようというものである。バックパッキング旅行は、そもそもその起源において「ナショナルなもの」を問い直す側面を対抗文化と共有していた。それが、これまでどのような経緯をたどり、今日いかなる形態をとっているのか、あるいは、もはや、そのような側面がなくなってしまったのか、さらには、上記「日本を降りる」ことや「外にこもる」ことがバックパッカーの対抗文化的側面といかなる関係にあるのか、さまざまな問題が設定可能である。

### 3. 本調査の概要

2008年2月、インドのヴァラナシとカルカッタの日本人宿を中心に、オーナーへの聞き取り、日本人バックパッカーへの聞き取り、日本人宿の歴史資料（オーナーが収集していた新聞記事の復元、旅行者の旅の記録）の閲覧・書写、そして参与観察を行った。

インドを選択したのは、バックパッキング旅行が有する対抗文化的側面を考察するにあたって、インドがもっとも適当であると思われたためである。なかでも、ガンジス河沿いの街ヴァラナシはそうである（近年、ガンジス河を舞台にドラマが製作された。『ガンジス河でバタフライ』）。また、カルカッタは、サダル・ストリートと呼ばれる世界でも有数のバックパッカー街を形成している。

さらに、「日本を降りる」「外にこもる」若者の多くはタイを中心としながらも、バックパッカーの旅先に広く存在していることが予測された。日本人宿（日本人のオーナーが経営する宿）に注目したのは、そのような若者を多く抱えていると思われたためである。

### 4. 調査の成果とインプリケーション

成果の大きかったヴァラナシについて述べる。まず、日本人宿であるが、1970年代後半から営業を開始しており、当時のヴァラナシにあっては宿として先駆的な存在であった。しかし、営業を開始した動機として、日本人ツーリストを保護する目的があったことは今日忘れられている。現在、ガンジス河沿いには、河から数十メートルも離れていないところにゲストハウスと呼ばれる宿が多く林立しているが、それらはいずれもここ30年の間に営業を開始した歴史の浅いものである。本報告では、①まず、日本人宿の歴史について、そのオーナーの生活史とかかわらせながら触れる。

日本人バックパッカーについては、その移動形態から三つの型に分けて論じていく。第一に短期滞在／移動型であり、インドを2~4週間かけて旅行する。多くの大学生がこれに相当し、ヴァラナシに数日滞在し、次の街へと移動する。第二に長期滞在／移動型であり、およそ8ヶ月のヴィザをフルに使って、インドあるいはネパールを旅行する。このタイプの者は大学をすでに卒業あるいは休学している。第三に沈没型である。これは旅行期間にかかわらず、一つの場所に滞在する。ただし、インドのリピーターであるという点で他のバックパッカーと区別されうる。

本報告では、沈没型に分類されうるバックパッカーのなかに、②（インド人男性の）ゲストハウスの建設・経営を（意図せざる結果として）経済的に支えている日本人女性バックパッカーが存在していること、さらにその構造が見えにくくなっていることを指摘し、彼女たちが例外であることを踏まえうえて、③沈没型のバックパッカーのなかから、二人のバックパッカーの生活史と聞き取りの結果に触れる。そして、インドにおける彼らの生活がナショナルなものに還元されない経験のありようを示唆していることを指摘する。そして、そのような経験を可能にしているのが「日本を降りながら／日本人である」という二重性を、どちらか一方に捨象することなく引き受けている点にあることを述べる。